2023 年度 研究旅行奨励制度 報告書

# 「クィア」を考える

## ―現代フランスにおける大衆への表象について―

所属：国際文化学部 国際文化学科
学籍番号：26AR094
氏名：大番 島

目次

I. 旅行論旨

1. 旅行目的
2. 期待される成果
3. 旅行日程表

II. はじめに ―ストーンウォール後のアート―

III. パリで見つけた「クィア」たち

1. 街中のクィア
   - 特別じゃないポスター
   - 視覚を強奪する落書き
   - 「異端」を大衆へ落とし込む本屋
2. 美術館・ギャラリーのクィア
   - 今と昔をハッキングする絵画
   - 境界をかき乱す装い
   - 融合し超越するドレス

IV. 「他者」の中の「私」

V. おわりに ―ごった煮のような世界で―

VI. 参考文献

# I. 旅行論旨

## 1. 旅行目的

本研究旅行の目的は、今日のフランスでジェンダーにまつわる事象がどのように表象されているかについて、市民の視点から調査することである。きっかけは、現代フランスのメディアで同性愛やジェンダーレスを前面に押し出した表象物（例えばジェンダーレスな衣装やメイクなどで知られるモデル Sofia Steinberg、同性愛を前面に押し出したモデル Pierre Amaury Crespeau、ファッションブランド DIOR の広告など）をよく見かけるが、先日ミュシャ展で商品的・性的対象としての女性イメージを強く押し出した作品を閲覧し、両者のギャップに驚いたことだ。フランスは日本に比べて「クィアなもの」に寛容であるように感じられるが、実際のフランスの現場におけるジェンダーの表象についてその特徴を調査することが目的である。

具体的には、ポンピドゥー・センターやパリ市立近代美術館などに訪れ、近現代の表象がどのようにジェンダーを扱っているか、また近代以前のアートと比べ何が「クィア」なのか、またそれらが、見る人や他の創作者にどのような影響を与えているのかを調査する。他にも、マレ地区やバスティーユ広場など、より市民に近い場所にある「クィアな」表象物を調査する。この調査を通じて、フランスの表象の場で「変なもの・異常なもの」が、「クィア」としてどのように扱われているのかを探求することが、本研究旅行の主眼である。

## 2. 期待される成果

フランスのクィアな表象のあり方に注目することで、現代フランスのジェンダーに対する意識、また人々のアートに対する意識の変遷に関する理解を深めることができる。今日、フランスは一般に「ゲイフレンドリー」な国といわれるが、ゲイのみならず他の「クィア」な存在を寛容に受け入れた表象物を調査することは、今後の日本におけるジェンダーの在り方・表象の仕方を考えるうえで重要な資料となるだろう。また、国際文化学部国際文化学科の表象文化コースにおいて、この研究が今後の学習や研究、論文作成に大いに有益であると考えられる。

## 3. 旅行日程表

| 出発予定日　2024 年　2 月　4 日<br>帰着予定日　2024 年　2 月　15 日 | | 旅行日数（発着日含む）<br>12 日間 |
|---|---|---|
| | 滞 在 地 | 行動・調査内容 |
| 第 1 日目 | 福岡<br>↓<br>シンガポール | 自宅<br>↓車<br>福岡空港 9:45 発<br>↓飛行機<br>シンガポール・チャンギ国際空港 15:20 着 |
| 第 2 日目 | シンガポール<br>↓<br>パリ | シンガポール・チャンギ国際空港 0:15 発<br>↓飛行機<br>シャルル・ド・ゴール国際空港 7:15 着<br>↓タクシー<br>パリ国際大学都市<br><br>・パッサージュ Galerie Vivienne などの書店、ギャラリー<br>ポスターや販売されているアート作品の調査 |
| 第 3 日目 | パリ | ・オルセー美術館<br>・Les Deux Magots など<br>レインボーフラッグを掲げる店舗などの調査<br>・des femmes（主に女性の著書や女性活動家、女性解放などの著書を取り扱う書店）やオルセー美術館周りのギャラリー<br>ポスターや販売されている著書、アート作品の調査 |
| 第 4 日目 | パリ | ・マレ地区<br>・バスティーユ広場など<br>店舗や街中のストリートアートについて調査 |
| 第 5 日目 | パリ | ・ルーヴル美術館 |
| 第 6 日目 | パリ | ・マレ地区のバスティーユ広場など<br>町中のストリートアートやギャラリーを調査 |
| 第 7 日目 | パリ | ・Librairie Japonaise JUNKU（パリのジュンク堂）<br>日本の著書がどのように扱われているのか、その他のパリの書店と比較<br>・ポンピドゥー・センター |

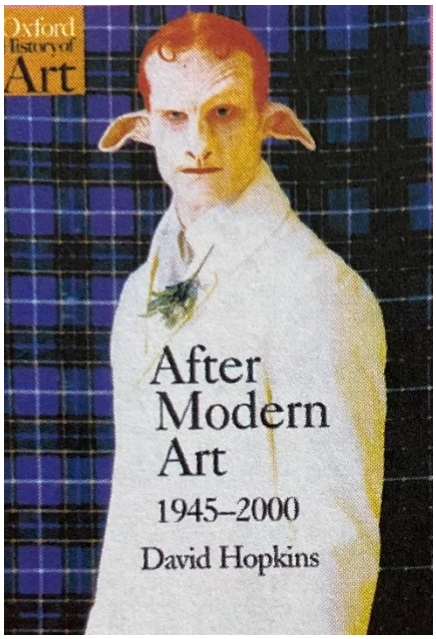
| | | |
|---|---|---|
| | | 近現代のアートを調査 |
| 第 8 日目 | パリ | ・Passage Jouffroy のギャラリーや Galignani などの本屋<br>・Galeries Lafayette |
| 第 9 日目 | パリ | ・パリ市立近代美術館<br>近現代のアートを調査<br>・シャンゼリゼ通り<br>・POP MART FRANCE<br>フィギュアや人形の調査 |
| 第 10 日目 | パリ<br>↓<br>シンガポール | パリ国際大学都市<br>↓電車<br>シャルル・ド・ゴール国際空港 22:20 発 |
| 第 11 日目 | シンガポール | ↓飛行機<br>シンガポール・チャンギ国際空港 17:55 着 |
| 第 12 日目 | シンガポール<br>↓<br>福岡 | シンガポール・チャンギ国際空港 1:20 発<br>↓飛行機<br>福岡空港 8:10 着<br>↓タクシー<br>自宅 |

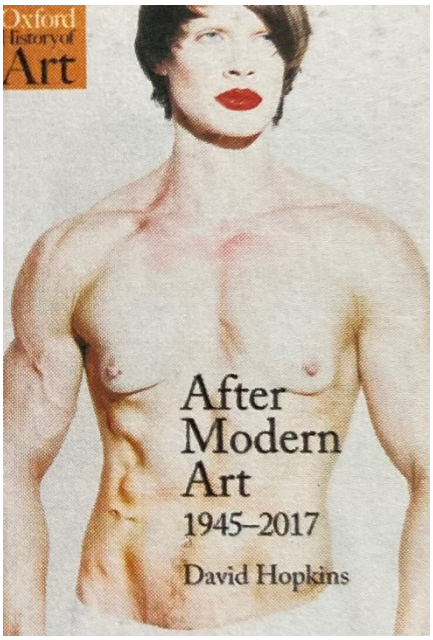
## II. はじめに ―ストーンウォール後のアート―

そもそも本報告書で扱う「クィア」とはなんなのか、最初にその定義や歴史などを軽く触れておく。「Queer（クィア）」の元々の辞書的な意味は、「変な」「風変わりな」「あやしい」「気持ちが悪い」などといった、異質で秩序から外れたような存在を指す意味を持つ。日本の 1988 年の辞書で「Queer」が「おかま」と訳されていることからも分かるとおり、以前まで「クィア」は差別的な言葉だった。

1960 年代の性的解放運動に続き、1969 年のストーンウォール事件[1]をきっかけに、ゲイやレズビアンなどの性的マイノリティが差別に強く抗議し、彼らの権利をはっきり主張するようになった。この頃から、彼らは自らを「ゲイ」や「レズビアン」だと呼ぶようになった。しかし、1980 年代にエイズが流行することで、ホモフォビア[2]の考え方が蘇り、性的マイノリティが再び病気的に扱われるようになってしまう。そのような逆風の中で、性的マイノリティたちはより結束を固める必要があった。「ゲイ」や「レズビアン」のような区別をつけた名前ではなく、すべての性的マイノリティを包括した呼び方が必要だった。そこから「LGBT」というまとめ方が生まれ、1990 年代には、「LGBT」よりもさらに広範囲を指した言葉である「クィア」という呼び方がなされるようになったのだ。

クィアがアートと結びついたのは 2000 年代以降のことである。2000 年と 2018 年に出版されたデヴィッド・ホプキンスの『モダン・アート以降』の表紙を見てみよう。上図は白いコートを着て、垂れ下がった耳を持つ、まるで羊のような人物がこちらを睨んでおり、また下図では筋骨隆々な体を持ち、白粉とルージュを塗って堂々と立つ人物が何かを見上げている。どちらも非常にクィアで印象的だ。また、2019 年、アメリカで開かれた「ストーンウォール後のアート」展でも、たくさんのクィアな作品が展示された。それまでの、変で、無視されてきたアートに新しい意味を見出せる可能性が徐々に芽生えてきているのだ。




↑デヴィッド・ホプキンス『モダンアート以降』上図：2000 年、下図：2018 年

[1] 1969 年 6～7 月にニューヨークの「ストールウォール・イン」というバーで、警察の捜査に対してゲイやレズビアンの人々が暴動を起こした事件。
[2] 同性愛や同性愛者に対する嫌悪感や偏見、恐怖心を持つ人や、差別的な態度や行動そのもの。

次章から、パリの街中で見つけた、それらの一部を紹介していこう。

# III. パリで見つけた「クィア」たち

## 1. 街中のクィア

- **特別じゃないポスター**

上図はパリ市内の Métro の駅構内に貼られていたポスターである。中性的な黒人と白人の 2 人のカップルがキスをしようとする瞬間の写真が使用されており、中央上には「Love unlimited（制限の無い愛）」という言葉が大きく印字されている。このポスターは「Passage du Désir」という、フランスのアダルトグッズブランドの広告である。日本で、多くの大衆が目にするような公共の場所でアダルトグッズの広告を見ることはほぼない。フランスでは、性愛における事柄が日本よりもオープンに扱われていることが分かる。中性的な 2 人がカップルとして採用されているところにも注目したい。「Passage du Désir」は、「すべてのセクシュアリティの人がアクセスできるように」というコンセプトでグッズを展開していることからも分かる通り、性的マイノリティへの積極的な支援・アピールがなされているのだ。また、キスをする描写をそのまま広告にしていることも、日本の文化圏からすると珍しく感じられる。

↑上図：Métro 駅構内で撮影、下図：パリ 2 区の街中で撮影

また、下図はアパレルショップの通りに面したショーウィンドウに貼られたポスターである。黒人男性が中指を立て、その中指を不敵な笑みで見つめている。エルフのような尖った耳、蛍光色のような黄色の瞳と不自然な瞳孔、鋭利に尖った爪が、非人間的に見える。さらに「中指を立てる」という、公の場ではタブーとされるハンドサインが、一般的な社会や秩序を逸脱した存在であるかのような雰囲気を醸し出している。1980 年代頃の日本の漫画・アニメなどではこのハンドサインがしばしば使用されることがあったが、本来の意味の周知が進むにつれ、現在の日本ではこのサインは咎められるようになった。例えば、大川ぶくぶの『ポプテピピック』の作中で登場人物が中指を立てるシーンがあるが、アニメ化にあたって、そのシーンはモザイク処置が行われていた。それほど侮辱的な行為

であることを踏まえると、公の目に晒されるショーウィンドウに貼られたこのポスターの「異様さ」が理解できる。しかし、これら 2 枚のような一見「異様な」、すなわちクィアなポスターが、当たり前のように貼られていることから、パリの街中でこれらが難なく受け入れられていると言うことが分かる。

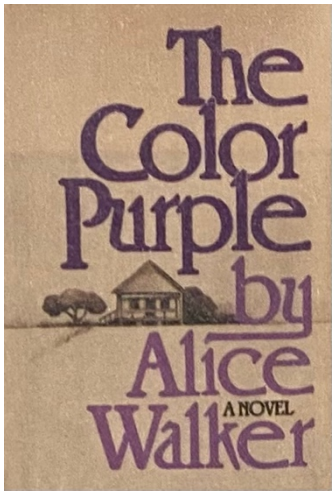
- **視覚を強奪する落書き**

ポスターよりもさらに積極的に「クィア」を取り入れている表象物が、パリの街中にはある。活気のある観光地の建物の壁に、『タンタンの冒険』シリーズの登場人物であるタンタンとハドック船長がキスをする様子が描かれている。原作にこのようなシーンはないので、「異様」に見える。ストリートアーティストの COMBO Culture Kidnapper が手掛けた作品である。2018 年 7 月に彼は自身のインスタグラムにこの作品を撮影した写真を投稿した。投稿には「#loveislove」や「#pride」といった性的マイノリティなどを応援するハッシュタグが付けられている。彼はフランスで活動するストリートアーティストであり、彼の作品は人気のある漫画やゲームのキャラクターなどに、現実世界の他の要素を足したり、置き換えたりすることで、作品を通じて大衆に注意を喚起しようとするものが多い。歩行者は否応なしに彼の作品を目の当たりにするので、彼の表現活動は「visual hijack（視覚的な強奪）」と表現される。歩行者は強制的に「クィア」を目にすることになるのである。

先図のようなものもそうだが、パリの街中では、右図のような、歴史が感じられる街並みとは相反する落書きがたくさん見られる。この落書きは、主に紫、緑、黒色が使用され、黒人の 2 人が見つめ合う様子が描かれている。また、中央に小さく「ANIMAL LIBERATION」の言

↑上図：パリ 2 区の街中で撮影、COMBO Culture Kidnapper《TINTIN KISSING》2018、下図：パリ 2 区の街中で撮影、作者不明

葉が書かれている。この言葉はピーター・シンガーの『動物の解放』を指す。シンガーはこの著作で人種差別や女性差別に対抗する平等の原理について、「利益に対する平等な原理」である、すなわち「ある存在が苦しみを感じることができる限り、その苦しみを考慮しないことは道徳的に正当化できない」と主張している。また、この落書きに描かれた2人は黒人女性のようである。なぜ彼女らの周りは紫で装飾されているのだろうか。紫はしばしばフェミニストの色として用いられる。フランスのシンガーソングライターAngèle が2019年にリリースした楽曲『Balance Ton Quoi』の MV でも、紫色の服をきた女性らが登場する。#MeToo 運動[3]からフランスでは#Balance Ton Porc[4]運動が広がり、この楽曲はそれら運動にインスピレーションを受け、性的被害だけでなく、社会での女性の扱われ方などの男女格差や人種差別など、より広い範囲の問題に問いかけをしている楽曲である。この楽曲は、運動が盛んだったこともあり、フランスで社会現象を巻き起こした。



↑左上図：アリス・ウォーカー『カラー・パープル』の表紙、アメリカ刊、1982年、レズビアン文学として知られ、映画化された。右上図：ブリッツ・バザウレ監督『カラーパープル』2023年、ワーナーブラザーズ公式 HP より、中央図：Angèle「Balance Ton Quoi」（2019）CLIP OFFICIEL より、右図：同性愛者であることを公言するヴァーチャルライバー「Uki Violeta」、にじさんじ公式 HP より

２枚の図のような落書きに代表される「ストリートアート」は、パリの外観を壊しているという批判もある。しかし、これらの落書きは、街並みの外観を崩し、歩行者の視覚を強奪するという、多少乱暴なやり方でないと届かないようなことを含意している可能性もある。それは、

---

[3] 「#MeToo（私も被害を受けている）」というハッシュタグをつけてセクハラや性的暴行などの性犯罪被害の体験を SNS で告白・共有する運動。非営利団体「Just Be Inc.」が 2007 年に性暴力被害者支援のスローガンとして「Me Too」を提唱し、2017 年にニューヨーク・タイムズの記者らが映画プロデューサーからの性的被害を告発したことがこの運動の火付け役となった。多数のメディア・著名人が参加している。

[4] MeToo 運動を受け、フランスでも同年に「#BalanceTonPorc（豚を告発せよ）」というハッシュタグが提唱された。Angèle の『Balance Ton Quoi』では「Porc（豚＝性的加害者を貶した呼び方）」の代わりに「Quoi（何＝性的被害などの悪事を指す）」という単語が使われている。

環境活動家たちが、ゴッホの絵にスープ缶を投げつけるという行為にも共通点がある。一見ただの乱暴な行為に見えるが、権威を持つ文化への一種の対抗と、それまで受け入れられることのなかった事象をどうにか受け入れさせようとする強い意志が垣間見えるのだ。

- **「異端」を大衆へ落とし込む本屋**

ストリートアートは少々乱暴な面があるが、より強固な手筈を踏んで「クィア」を大衆へ伝えようとする表象活動も存在する。サンジェルマン地区にある「Editions des femme」は、1973 年に精神分析家であり、政治学者でもある Antoinette Fouque が設立した女性向け書店である。女性作家の執筆活動や女性運動家、女性解放運動を支援・奨励し、それらを普及するための最初の出版社兼本屋で、設立者である Fouque は「女性作家は、彼女らにも書くことができる場所があることを知るための土地・庭が必要だった。」と主張している。女性がものを書く・主張するという、それまで「異質だった」ものを、強固なやり方で大衆にインストールさせようという強力な例である。

また、右下図は、日本の書店であるジュンク堂のパリ支店「JUNKU」の店内の「Japanese Manga」コーナーのディスプレイを撮影したものである。「SHŌNEN」と「SHŌJO」という題のついた本が 2 冊並べられている。日本の「少年漫画」や「少女漫画」に代表されるような少年少女のキャラクターを日本独特の概念とともに紹介している本である。日本の創作界隈では少年少女を描くことは非常にメジャーである。しかし、日本における少年少女への執着は、世界の基準と必ずしも一致しているわけではないらしい。日本の人気イラストレーターであるさいとうなおきは、自身の Google ドライブに載せていたイラストらがアメリカの Google 本社の運営に「児童ポルノ違反判定」を受け、彼の Google アカウントを削除・永久

↑上図 2 枚：出版社兼本屋「Editions des femme」にて撮影、下図：ジュンク堂のパリ支店「JUNKU」にて撮影

停止されてしまうという事件が起きた。彼は、少女を描いたイラストが特に人気であるため、保存されていたイラストも少女が描かれたものが必然的に多くなっていた。この出来事は日本の多くのイラストレーターを震撼させた。日本人が手がける人気漫画やイラストの絵柄は、海外のものに比べ、より若く幼く見えるものが多い。日本では少年少女のキャラクターや物語は馴染み深いものであるが、フランスの本屋に先の図のような解説本が陳列されているのを見ると、フランス人をはじめとする欧米人にとって、日本の「少年少女」が「クィア」とまではいかないまでも、馴染みのないものなのだろうと推察できる。

## 2. 美術館・ギャラリーのクィア

### ● 今と昔をハッキングする絵画

世界中で人気になった少年、もしくは少女のキャラクターといえば何が思いつくだろうか。パリの街では、馴染み深いキャラクターたちとの奇妙な邂逅を果たすことができる。Gallery Vivienne というパッサージュには「BLASE WORKSHOP」というギャラリーがあり、そこに展示されていたのがこの 2 枚である。Blase は 1980 年生まれのフランスのアーティストで「Hacker-Painter」として知られる。「hack」は「たたき切る、（プログラムなどを）巧妙に改造する」などの意味があり、「hacker」とは「コンピューターに詳しい人、転じて、コンピューターを使用して不正行為を行う人」などを指す。Blase は骨董屋やオークションで売れ残った絵画や人気のない古い絵画に、現代のサブカルチャーや時事問題などを取り入れる形で加工して作品を制作しているので、「Hacker-Painter」と呼ばれるようになった。上図は手塚治虫の『鉄腕アトム』のアトムの髪型と格好をした、憂げな表情を浮かべた男性が描かれており、また下図では武内直子の『美少女戦士セーラームーン』の月野うさぎの衣装（しかし原作のものとは若干異なり、露出が多い）を着用した男性が、ステッキを構え、顔を赤くし何かに対して怒りを露わにしている。Blase の作風はクラシックな人物画のような様式に則っているので、大衆的な娯楽文化と混ざって、非常に倒錯的で滑稽である。過去の作品を使って、現代の文化とともに再構成する手法で表象

↑ギャラリー「BLASE WORKSHOP」にて撮影、上図：Blase《Fantasy #2（空想その２）》2021-2023、下図：Blase《Fantasy #3（空想その３）》2021-2023、どちらも 81×65 cm、キャンバスに油彩

物を生成することで、Blase はポスト・ヒストリカル[5]なアート界にメスを入れようとしている。すなわち、現代のアートとそうでないものの境界線がどんどん曖昧になっていくことを指摘したいのだ。

● **境界をかき乱す装い**

ポンピドゥー・センターの企画展で、スウェーデンの Christer Strömholm のストリート写真のシリーズが展示されていた。彼は特に、トランス女性のポートレートシリーズでよく知られている。彼は 1950-1960 年代にパリのブランシュ広場やムーラン・ルージュ近辺でトランスジェンダーを主題とした写真を撮っていた。これらはその中の 2 枚である。上図では、洗面台の前で 1 人のトランス女性がカメラの方に視線を向けている。右手にはアイライナーのような化粧道具らしきものを持っていることから、彼女は身支度の最中だと予想できる。カメラに向けて艶かしくポーズをとっているものの、衣類を何一つ身におらず男性器が露わになっており、「女性」としての準備をしていることと相まって倒錯的でトランスな雰囲気が醸し出されている。彼女のドラァグ[6]の実践が、古典的な男性と女性という二元的なあり方に囚われず、スペクトラムな性の在り方を教えてくれる。また、Annette Messager の「ドレスの歴史」

→ポンピドゥー・センターで撮影、Christer Strömholm のポートレートシリーズ、上図：《Wanda》1966、中央図：《Soraya in the Mirror》1966、左下図：世界で初めて性転換手術（男性から女性）を受けたリリー・エルベ（1926 年）。

右下図：「ローズ・セラヴィ」マン・レイ撮影、1921 年、マルセル・デュシャンには「ローズ・セラヴィ」というアルター・エゴ（もう 1 人の自分）があった。写真はデュシャンがローズに扮している時だ。
それぞれ海野弘『クィア・アートの世界―自由な性で描く美術史』16 頁、217 頁より引用。

[5] それまで直接的に発展していた歴史（特に美術・アートの歴史）が終焉を迎え、特定の中心を持たずさまざまな事象が多元的に発生し広がる状況のこと。
[6] 従来、ジェンダーに固定的に関連付けられていた服装を、他方のジェンダーを持つ者が着用すること。特に、男性が派手な衣装や化粧などの女装をすること。

シリーズの作品は、28 色の異なるドレスが額縁に入れられ、そこに写真がピンで固定されている。彼女は「少女の幸せの幻想」を呼び起こすためにプリンセスドレス[7]を使用している。写真には洗礼や結婚などのさまざまな女性にまつわるイベントの風景が映っているものの、肝心の女性の身体がない。女性の主体性への軽視、ガラスケースに入れられた鑑賞物としての女性性への批判を表している。

↑上図：ポンピドゥー・センターで撮影、Annette Messager の「ドレスの歴史」シリーズ、右：《Histoire de la robe rose》1990、左：《Histoire de la robe bleue》1990、下図：TV アニメ『赤毛のアン』日本アニメーション

- **融合し超越するドレス**

プリンセスドレスに代表される、膨らんだ袖やスカートに何を想像するだろうか。モンゴメリの『赤毛のアン』では、主人公のアン・シャーリーが「袖の膨らんだお洋服」に憧れるという描写がある。それに対して、アンの義母マリラは、膨らんだ袖は布の無駄使い、虚栄心を煽ると主張する。Messager が主張していたように、膨らんだ袖やスカートは少女が憧れるものだという幻想がある。

→ポンピドゥー・センターで撮影、左図：川久保玲《COMME des GARÇONS》2021-2022 年秋冬コレクション、右図：Charles de Vilmorin《ROCHAS》2021 年春夏オートクチュール・コレクション

ポンピドゥー・センターに展示されていたドレスを見てみよう。上図 2 枚の写真に映っているドレスは、アンの「膨らんだ袖」という描写を彷彿とさせるが、反対に次のページの右上図のド

[7] 上半身をフィットさせ、腰から裾にかけて膨らみを持たせた、上半身の細さを強調するシルエットが特徴のドレス。

レスにはその要素は排除されていることが分かる。「COMME des GARÇONS」は、川久保玲によって1965年に創業され、1981年にパリコレデビューを果たしたファッションブランドである。前のページの左図のドレスは 2021-2022 年秋冬コレクションで発表されたものである。過剰に膨らんだ白い袖とスカート、胸の部分は黒色で体にフィットするようになっており、まるで誇張したプリセンスドレスのようだ。中でも特徴的なのは、この過剰な膨らみと黒いハットだろう。過剰な膨らみは「少女の憧れの幻想」に代表されるような、過剰な女性性や少女性を意味する一方で、従来男性が身につけるアイテム、すなわち古典的な男性性を意味するハットがともに存在している。COMME des GARÇONS は、「黒の衝撃[8]」や、「ボロルック[9]」によって、海外のファッション界を大きく揺さぶり、それまでのファッション界内の伝統をことごとく破壊した。このブランドのコンセプトは「反骨精神」と「見たことないもの」。川久保玲が思い描くイメージは、社会に流されることのない、従来型の女性らしさのない自立した女性像である。つまり、彼女が上図のドレスに従来型の女性性と従来型の男性性を融合させているのは、男女二元論を超越した先にある「クィア」を表現するためなのだ。

一方、右上図のドレスは比較的新しいブランド、2016 年にパリで創業されたファッション・ブランドである「MARINE SERRE」の 2021 年の春夏コレクションで発表された。創業者である Marine Serre は、創業当初から「エコフューチャー」をコンセプトに掲げて活動しており、「エコな未来の服」を模索している新鋭デザイナーである。「MARINE

↑ポンピドゥー・センターで撮影、上図：Marine Serre《MARINE SERRE》の 2021 年の春夏コレクション、左下図：《Yohji Yamamoto》1986-1987 年秋冬コレクション、右下図：《Yves Saint Laurent》2008 年コレクション

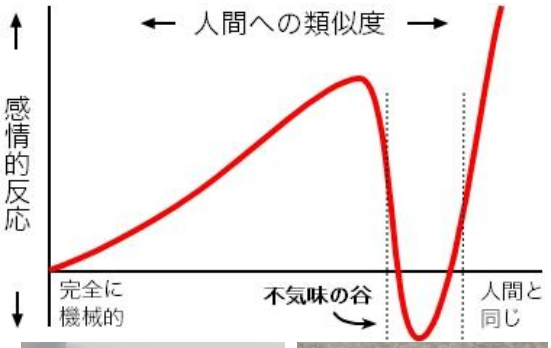
[8] 1980 年代、COMME des GARÇONS がパリコレで当時タブーだった黒を用いたコレクションを発表したことでファッション界に衝撃が走ったこと。これによってその後「黒の流行」の時代が到来すると、赤などのカラフルな色を基調としたコレクションを展開するようになり、COMME des GARÇONS のマジョリティになびかない「反骨精神」が伺える。

[9] 1980 年代、COMME des GARÇONS が発表した、穴が空いていたり、端切れがついていたり、ほつれていたり、破れていたりするようなデザインのこと。当時は華やかなデザインが主流だったので、このコレクションもファッション界にとって青天の霹靂だった。

SERRE」のアイコンである三日月が散りばめられたインナーに、まるで作業服のような、一見機能的に見える装飾が施され、その装飾の上にパニエ[10]の一種であるクリノリンが付けられている。クリノリンは装着されてあるものの、膨らみは一切なく、タイツのようにピッタリと体のラインが出ている。全体的に機能性が重視されているようなデザインだが、足元に注目するとヒールがあしらわれたパンプスがチョイスされている。当時の女性のファッションにおいて、上半身はコルセットでできる限り細くし、下半身は大きく膨らませてより上半身の細さを強調させるのが専らの流行であった。しかし、これらは機能性からは程遠く、動きづらさや身体への負担により怪我や事故死が後を絶たなかった。そのため、女性の活動を制限するクラシックなファッションと、現代的な作業服のようなファッションという、古い文化の現代への昇華と、本来なら相入れない存在同士の融合を感じることができる。Marine Serre はこのドレスで、伝統と革新の 2 つを融合させ、過去と現代を超越した先にある、今はまだ見ぬクィアな「未来」の衣装を表現しているのだ。

## IV.「他者」の中の「私」

フロイトは『不気味なもの』の中で、「親しいもの」と「不気味なもの」という一見反対なものが、実はまったく別者ではないのだと語っている。例として、人形がある。日本人形やピエロを不気味に思ったり、一昔前の CG アニメーションなどに登場する人間のキャラクターに違和感を持ったりする。これは、「不気味の谷現象[11]」と呼ばれる。この現象を生じさせる原因として論じられているのが「分離困難仮説[12]」である。人はその正体が確定できないものに対して恐怖や嫌悪を感じるという。人間とロボットの組み合わせに限らず、人間は分離困難なもの、未知のものを回避する傾向がある。逆を言えば、対象に既知のもの、すなわち、「人間」を見出すからこそ、不気味に感じるのだ。人間は「私」とは違う「他者」、しかし、その「他者」



↑上図：不気味の谷現象をグラフ化したもの、左下図：「あわわロボ」、FNN プライムオンラインより引用、右下図：SNS 上でトレンドになった「不気味の谷メイク」、モデルプレス公式 HP より

[10] 18 世紀にヨーロッパで流行した、スカートやドレスを大きく丸く膨らませるためにスカートの下に着用する下着のこと。特に、鯨のヒゲやワイヤーでできた大きなドーム状の、1840-1860 年代に流行したものをクリノリンと言う。

[11] 人間を模した像を実際の人間が目にするときに、その人間の像が人間に似れば似るほどその像に対して好感度が上がっていくが、見た目の写実性があるポイントに達すると、好感とは逆の違和感・嫌悪感・不気味さといった負の感情が唐突に強く現れるという現象。1970 年にロボット工学者の森政弘が提唱。

[12] CG で加工したイチゴとトマトの混合物の画像を見ても食欲が沸かない、犬のぬいぐるみに異なる動物のパーツを合体させた画像に不気味さを感じるという仮説。三浦佳世、河原純一郎『美しさと魅力の心理』ミネルヴァ書房、2019 年、158 頁。

は「私」を含むもの、親しいものである「私」と「他者」が融合した何かに対して不気味に思うのだ。つまり、「不気味なもの」、すなわち「クィア」とは「私」の中に含有されてあるものと言うこともできる。

## V. おわりに ―ごった煮のような世界で―

かつて「人間」を規定する知識は人間によってきちんと定められ、範囲内の存在は保護したが、範囲外の存在は「異端」として排除していた。しかし、現代ではそれらの知識は崩壊し始めている。1970 年代にポップ・カルチャーとアングラ・アートなどによって、ポスト・ヒストリカルなアート界の到来が決定的になった。2010 年代以降、アート、音楽、パフォーマンス、映画などは混ざり、マルチメディアの作品がますます増えている。アート界のみならず、すべての場所においてグローバル化、多民族の交流もより大きくなっている。海野弘によれば、「現代のアート界は西洋中心的・封建的な美術史にとっての世紀末」なのである。確固たる軸を持たない事象が多元的に発生し、バラバラの方向へ広がっていく収拾のつかないごった煮のような時代である。混沌と化した世界だからこそ、「異端」と呼ばれた表象物、自分とは違う「他者」に意識を向けて、「人間」、ひいてはこれからの世界の在り方を模索する必要がある。

「クィア」は人間と非人間、男と女の境界を撹乱し、曖昧にするので、見るものを驚かせ、戸惑わせる。フロイトにならって言うならば、「クィア」は変なものであり、「他者」なのだが、それは実は「私」の深層にある「親しいもの」なのだ。だからこそ、「クィア」な他者を見ることは、自分自身を見ることであり、他者への理解のみならず「私」へのより一層の理解を深めることに繋がる。一見受け入れることができないクィアな他者は、もう 1 人の私かもしれないのだ。パリで見つけた「クィア」な表象物たちは、他者をどうやって理解するか、どうやって対話することができるかを問いかけてくる。「クィア」と対話することは、他者とともに生きる方法を探る上で重要な鍵となるだろう。

## VI. 参考文献

・ピーター・シンガー『動物の解放』戸田清訳、人文書院、2011 年
・日置久子『女性の服飾文化史―新しい美と機能性を求めて』西村書店、2006 年
・海野弘『クィア・アートの世界―自由な性で描く美術史』パイインターナショナル、2022 年
・『現代思想 2018 年 7 月号　特集 性暴力―セクハラ・フェミニズムと MeToo―』青土社、2018 年
・グレイソン・ペリー『みんなの現代アート―大衆に媚を売る方法、あるいはアートがアートであるために』ミヤギフトシ訳、株式会社フィルムアート社、2021 年
・森政弘「ロボット博士の創造への扉 第 27 回 不気味の谷：人型ロボットデザインへの注意」『ロボコンマガジン』28 号、株式会社オーム社、2003 年

・三浦佳世、河原純一郎『美しさと魅力の心理』ミネルヴァ書房、2019 年
・フロイト『ドストエフスキーと父親殺し；不気味なもの』中山元訳、光文社、2011 年
・Eureka FOONG『なぜパープル？』東京カレッジ、2021 年 3 月 8 日、https://www.tc.u-tokyo.ac.jp/weblog/3790/
・BLASE WORKSHOP HP、 https://www.blasepheme.com/home-fr
・FASHIONSNAP HP ファッション・アパレル関連用語集、https://www.fashionsnap.com/dictionary/